

貞觀政要

水野 吳兢

聡

訳 撰

## 太宗とは

生年五九九年、没年六四九年。姓は李、諱(いみな)は世民。太宗は、廟号である。初世皇帝高祖李淵の第二子。唐朝三百年の基礎を固め、後世貞観の治とよばれる善政をしいた中国史上最高の明君とされる。幼少時よりすぐれた資質をもっており、「帝王の相あり」と予言された。

方(まさ)に四歳。書生有り、高祖に謁して曰く、

「公は貴人なり。必ず貴子有らん」

と。太宗を見るに及びて曰く、

「龍鳳の姿、天日の表、其の年冠にちかくして必ず能く世を濟(すく)ひて民を安んぜん」

と。書生已に去り、乃ち其の語をとりて之を名づけて世民と曰ふ。

(『新唐書』本紀第一)

長じて世民は、青年期を隋末の混乱のただ中に迎える。隋臣として太原の留守を任じてい

た、父李淵は、この頃地方の豪族や門閥と結んでいた。世民もまた財を投じ、有為の人材を多く養っていたのである。二十歳を迎えた世民は、まさに予言どおり、父李淵に義軍の拳兵を促す。自ら李淵の一軍を率いて長安へ進撃。破竹の勢いで拳兵より四ヶ月にして長安を占領した。当初三万の義軍は、この時二十万の大軍になっていたという。

六一八年(武徳元年)、李淵は即位し唐が成立。しかし隋末の世は乱れ、各地に群雄が割拠し、いまだ唐王朝が確立したとはいえない状況が続いた。李淵即位後、世民は唐軍の先鋒となつてこれらの勢力を次々に討伐。ついに唐王朝の統一が成つたのである。

高祖李淵は長子の李建成を皇太子に立てていた。しかし武徳九年六月、次子世民が太子建  
成と弟元吉を殺害する「玄武門の変」が起こる。

竇建徳・王世充等、群雄を平定した世民の戦功は唐建国随一のものであった。世民の勢力が強大化することを恐れた建成は、一派排除を画策したが、世民の参謀である房玄齡・杜如晦を左遷させたことが、玄武門の変の直接の引き金になつたといわれる。身の危険を感じた世民は、父高祖に建成と元吉の後宮での醜聞を告げた。そのため宮城に召喚された建成・元吉を、世民は配下九名とともに待ち受ける。そして建成は射殺され、元吉は矢で射られた後、尉遲敬徳に討ち取られた。

玄武門の変は、建成を戴く旧地主集団と世民を推す新興地主集団の争いに起因するとの分

析もある。しかし現在、その直接的要因は皇族内の後継者争いとする見方が一般的である。事件の三日後、世民は皇太子となり、後に高祖は退位を宣言。三カ月後の武徳九年八月九日、世民は唐第二世皇帝に即位した。

即位後、李世民太宗は年号を「貞観」と改め、広く人材を求め、国家機構と制度を整備。とりわけ内政に傾力し、国力の充実をめざした。外政としては宿敵の突厥をついに下し、来朝した君長たちから「天河汗」、すなわち世界の皇帝を表す称号を奉られる。先に述べたように、太宗治世の二十三年間は、年号をとって「貞観の治」とよばれることとなった。農業、産業はもとより、文化・学問・芸術が大いに発展・進化した、中国史上例のない世界的文化国家がここに創出されたのである。

太宗が歴代中国王朝の中で、最高の名君とされた理由は何か。端的に言えば、それは、「人材を登用する」「諫言を受け入れる」、この二つに集約されると思う。

人材登用について、とりわけ本書の主要人物たる魏徴を抜擢・重用したことに太宗の稀有な資質が顕著に読み取れる。隋末の混乱期、群雄の集団に身を投じていた魏徴は、やがて唐に属し、太宗の兄、皇太子建成に仕えることとなった。玄武門の変の後、魏徴は捕えられ太

宗の前に引き出される。太宗は厳しく詰問する。

「汝が、我ら兄弟の仲を離間させたのは、いかなるわけか」

人みな、今まさに魏徴は斬られると固唾を呑んだ。魏徴はきわめて平静に、

「皇太子が、もしも臣の言に従えば、今日の禍は間違いなくなかったことでしょう」

と答えた。

太宗はこの答えに驚いて面色を改める。丁重に礼をもって接し、諫議大夫として側近の中心に召し使うこととなったのである(巻第一 任賢 第三)。

太宗の人材登用術は、魏徴をはじめ唐朝重臣の大半を、敵方陣営のもつとも頑強に抵抗した人材から抜擢したことに、その特長がある。私怨を捨て、ひたすら公益に身を捧げる。なかなかできることではあるまい。

『貞観政要』全編は、太宗と侍臣による諫争の記録といっても過言ではない。この世でもっとも尊い皇帝が、もっとも耳にしたくない己の欠点、悪行を臣下が公に指摘し、正すのである。天より上なく、神にも等しい身にあつては耐え難いことであろう。

太宗治世の体制をよく特徴付けるのが、起居注と諫議大夫という二つの正官を置いたことである。

起居注とは古代の左史・右史にあたる史官で、日頃天子の側に侍し、その行いと言葉を善悪

もろさず記録する。皇帝はこれを見ることは許されず、没した後、この記録をもとに国史が編纂されるのである。

「朕、不善有らば、卿必ず記録するや」

「道を守るは、官を守るに如かず」

（巻第七 論文史 第二十八）

ある日、起居注の褚羸良に、自らの記録閲覧を太宗は問うてみた。これを見て自身気づかぬ悪行がもしもあれば後のために改めたい、という。褚羸良は、国の正道を守るためにはいかなる場合も決して見せられないと申し出を厳肅に拒むのであった。

諫議大夫は、天子を諫める専任の高官。中国全土を統べる皇帝という、強大な権力に対する抑止装置である。漢代より元代まで置かれたが、当官がこれほどまでに本来の任務を完遂したのは、後にも先にも太宗の時代のみであった。古来、専制君主を諫めたため、実に多くの有能な直臣が命を落としている。まさに命がけの仕事であったことが歴史を見ればわかるのだ。

生涯数百度に及んで太宗を諫めた魏徵をはじめ、房玄齡・虞世南・王珪・馬周等、多くの

臣下により、内政・外交・土木・律法などの国策から、皇族問題や太宗の趣味・私事にいたるまで、多年にわたりおびただしい諫言がなされてきた。そのほとんどを、あたかも渴く人が水を求めるように、嬉々として太宗は受け入れたという。貞観の治は、まさにこの信と義をもととする君臣の交わりが実現した奇跡と呼べるかもしれない。

以上が偉大な皇帝太宗の光の部分であるが、神ならぬ身にはむろん影もある。玄武門の変で実の兄弟を殺害したことを太宗の最大の影とするならば、さらに後年、後継者問題と高句麗征討という、二つの影が太宗の晩年を拭い難くおつた。

貞観十九年、二十一年、二十二年の合計三度、太宗は自ら隋の轍を踏み高句麗遠征の大軍を発する。しかし、いずれも失敗に終わった。二十二年の外征に際し、病床に伏しもはや死を迎えんとする房玄齡が、

「高句麗外征を思いとどまってくれるならば、臣は死すとも魂魄は永遠に朽ちず、国を守りましよう。」

と子を介して上表する。しかし建国最大の功臣の最後の奉公である遺訓に太宗は従うことはなかった(巻第九 論征伐 第三十四)。

後継者の選定は、晩年の太宗にとって最大の懸念であった。太宗が三男の恪と四男泰を偏

愛したため、皇太子承乾は徐々に道に外れ、ついに謀反の疑いで廃嫡され没する。その後、皇后の実兄、褚羸良が薦めた九男の治（三世高宗）が皇太子となるが、万事控えめで凡庸な器であり、即位後皇后である武則天の台頭を許し、一時唐王朝が途絶える一因となつてしまつた。

玄武門の変と、これら二つの影を拭い難く身にまとつたまま、貞観二十三年太宗はその生涯を終えた。いかなる聖人、賢者であろうとも、光があれば影もあるのが人間。影の暗さが、一層光の輝きを増す場合もあるとはいえまいか。

「隠すこと有るを得ず。宜しく次を以て朕の過失を言ふべし。」

（補篇 卷一 納諫篇）

貞観八年、侍臣を集め太宗は一人ずつ順に皇帝の過失を指摘させたという。そしてまた、歴代帝王の多くが即位の最大の儀式として執り行う「封禅」を、名実共にもつともふさわしい帝王たる太宗だけが行なっていない。自ら一人の弱い人間として、わが身の不足を終生怖れ続けたゆえである。

生涯に一点の曇りのない聖人は、敬われはするが、手本とはされない。しかし後世の人が、



その事跡を学び、目標とし、もっとも敬愛した帝王の姿がここに現れるのである。

## 巻第四

### 規諫太子 第十二

### 第三章

貞觀十三年、太子の右庶子、張玄素（ちやうげんそ）は、太子承乾（しやうけん）が狩獵（ふけ）に耽つて學問を廢するにおよび、これを上書して諫めた。

「臣は聞いております。」

『天は選ばれた者に親しむのではなく、ただ徳を積む者を助く。』

と。まこと天の道に違えば、人にも神にも見棄てられます。いにしえの狩獵の礼は殺生を教えるものにあらず、まさに民のため、害を除かんとするもの。それゆえ聖王湯（せいおうとう）は、狩場の四面の網をただ一面のみ開けること、と定め、天下はその仁政に従いました。今、太子は苑内（えん）で狩を楽しむ。名目こそ野山での狩獵とは異なっておりますが、もし際限なくこれを行えば、ついに正法に背きましよう。」

「さらに傳説は、

『学問というものは四、古を師とするもの。それ以外の方法は聞いたことがございません』  
という。すなわち道を広めるには、古に学ぶべき。古を学ぶためには、必ず師の教えによらねばなりません。恩詔により、すでに孔穎達に侍講させています。願わくは、太子がこの者たちに、しばしば下問なされ、万分の一の補いとなされますように。加えて広く高名で正しい学者を選び、朝夕側近く召され、聖人の書を読み、故事を学んでいただきたい。そして日々、己の足らざるを知り、月々己の為すべきことを忘れざるように。これすなわち、善を尽くし、美を尽くすこととなります。かくなる上は、夏の禹王の子、啓も、周の武王の子、誦も太子の足元にも及びますまい」

「そもそも人の上に立とうとする者は、善行を求めずにはおられぬもの。ただ理性が欲望に打ち克てぬゆえ、物事に耽り、惑わされ、乱をひき起こすのです。これがはなはだしくなると、忠言はついにふさがれてしまう。臣下はいい加減におもねり、君臣の道は徐々に廃れていきます。古人はいいいます。

『小悪も見逃さず<sup>五</sup>、小善も恥じてなさざるることなかれ』  
と。つまり禍福は、小事より徐々にあらわれ来たるもの。殿下は尊い皇太子の地位におら

れ、まさに広く善政を敷かれるべきです。しかしながら、狩猟に遊び呆けておられる。これではどうして祖先の祠を司ることができましようか。

創業時の理想をもって、終わりをまっとうしようとしてさえ、人はなお次第に衰えゆくものです。すなわち始めすら慎まぬ者が、どうして安らかに終わりをまっとうなどできるものでしょうか」

しかし、承乾はこの言を聞きいれることはなかった。

そこで玄素は、さらに上書して諫める。

「臣は聞いております。礼によれば、

『皇太子といえども<sup>六</sup>、学校での席次は年齢順に扱われる』

と。これは、太子なればこそ、君臣・父子・長幼の道を教えんとするもの。しかし、君臣の意味、父子の情、尊卑の差、長幼の礼儀を心に留め、国外までも広く伝えんとするには、自身の行いにより遠くまで鳴り響かせ、自身の言葉により広く行き渡らせねばなりません」

「伏して思いますに、殿下は素晴らしい素質<sup>七</sup>をお持ちでございます。できることなら、なお学問に励まれ、立派な行いを身につけられますよう。僭越ながら、孔穎達・趙弘智<sup>八</sup>両師を拝見するに、ただ徳を備えた大学者というだけではありません。兼ねて高い政見を併せ持つも

のです。できればたびたびこれらの者を招いて講義を受け、物の道理を明らかにし、古を見、今を知り、知恵と徳の光を増されんことを期待しております。

馬・弓・狩・酒・歌・女・珍物などは、ただ耳目を喜ばせるだけのもの。いずれ精神を汚してしましましょう。悪習に久しく染まれば、やがて本性も悪となりゆく。古人も、

『心は万物の主。節操なく移ろい揺れる時、ついに乱心にいたる』

とっております。殿下の背徳の源は、これらにあるのではないか、と臣は恐れるのみです」

承乾は、この書を見えます怒り、玄素に、

「汝は気でも触れたのではないか」

といった。

#### 第四章

貞観十四年、太宗は玄素が太子にしきりに諫言していることを知り、  
銀青光祿大夫ぎんせいこうろくたいふ、

行太子左庶子こうたいししきしよしに累進、任命した。

さてこの頃。ある日承乾は宮中で太鼓を叩いていた。その音が外まで漏れ聞こえてくる。玄素は門をたたき、お目通りを願い、厳しく切諫した。承乾はただちに宮内の太鼓を引き出し、玄素の面前で叩き壊す。そして門番に命じ、玄素が早朝に出仕する折を伺い、物陰より馬の鞭で打たせた。玄素は危うく落命するところであつた。

またこの頃、承乾は好んで園亭えんてい、楼閣ろうかくを造築。奢侈しゃしを極め、費用は日増しに嵩かさんでいった。これを見、玄素は上書して諫める。

「愚かなる臣ごときが、天子、皇太子の両宮にお仕えし、無為に位を盗んでおります。これは臣にとつて大河、大海のごとき恵みといえましようが、国にとつては毛ほどの益ともなつておりません。これをもって、愚かなる誠を尽くし、臣下の忠節を尽くそうと思つてもありません。」

伏して思いますに、皇太子の責はまことに重いもの。徳を積み威光を広めずに、なにゆえ王業を継ぎ、守つてゆくことができませんようか。」

「太宗皇帝と殿下とは、私的には父子の間柄。そして王家の用務は公務を兼ねることから、殿下の経費には制限を設けられませんでした。この決定よりいまだ六十日も経っていないに

も関わらず、皇太子の出費は七万を超えています。贅を尽くした奢り、ここに極まれり、と  
いわざるを得ません。

楼台のもとにはただ工匠だけが集まり、宮苑の内に賢士は一人も見当たりません」

「今、太子を孝敬の点からみれば、視善問賢しぜんもんけんの礼を欠き、恭順という点では、君主の教えと  
慈愛の道に背いています。風評を聞いても、学問を愛し、道を好んだ形跡がなく、挙動をみ  
れば、私刑をほしいままとする罪がある。宮中では良臣が側に仕えたことがなく、多くの邪  
臣やお調子者のみが深宮に巢食すくっておりませう。太子が愛好する者は、遊び人や身分の卑しい  
者たち、施しを与えるのは絵描きや彫刻家ばかり。外より伺い見るだけで、すでにこの過失  
が認められます。内に隠れた悪事は数え切れぬほどでありませう。太子の禁門は、今や市  
の門と何ら変わりなく、朝夕雑多な人間が出入りし、悪評は遠くまで鳴り響いております」

「右庶子の趙弘智は、経書に明るく、身を修めた当代の名臣です。臣は、太子が彼をしはし  
ば側近く召し寄せられんことを望んでおります。弘智と語り、談じ合えば、妙計良案を立て  
る助けとなる。さて、このようにいったところ、臣はかの者を濫りに引き立てる、との嫌疑  
を蒙りました。これではいくら、

『善に従つこと、流るるがごとし』九

といつても、流れに近寄ることすらできませんまい。非を取り繕い、諫言を拒めば、必ず王室に損失をひきおこしましょう。古人もいつております。

『良薬口に苦しし、忠言耳に逆らう』

と。伏して願います。安楽な時ほど危難を案じ、日一日と慎まれますように」

上書が届くと、承乾は大いに怒り、刺客を遣わし、玄素を葬ろうとした。しかし、まもなく太子を廃せられることとなった。

## 第五章

貞観十四年、太子詹事せんじの于子寧うしねいは、太子承乾が盛んに宮殿を造営し、贅沢が度を超え、音楽に耽溺する様を見て、上書をもつて諫めた。

「臣は聞いております。

『儉約を勧め、費用を節約することが、まことの道を広める源。贅沢を好み、欲望をほしいままとすることは、徳を破る元である』

と。そのため、雲を凌ぎしの、天に届くほどの宮殿増築を西戎せいじゆうの人は非難ひなんし、聳え立つ屋



根、彫刻で飾られた塀を夏の禹王は戒めたのです。

昔、趙盾<sup>ちょうとん</sup>が晋の改革を行い、太公望が周の師となつた時、ともに散財を節制せしめ、重税を諫めました。忠を尽くし国を救い、誠心誠意君主に奉仕し、国家繁栄を恒久のものとし、国の名声を天下に広めんとしたものです。これらみな書に著され、美談とされております」

「その上、今の太子の宮殿は元々隋のもの。これを見る者は、その贅<sup>ぜい</sup>をそしり、その華美を嘆きます。どつしてさらに、修造する必要などございませうか。日に日に財貨は費やされ、工事は止まず、斤や斧の作業は続き、宮殿は磨き上げられている。

また、大工や下僕が宮中に入つても誰も見張つておりません。この者ども兄弟には国法を犯した者もいると聞きます。これらが自由に御苑を往来し、宮殿に出入りしている。身にはやつとこと鑿<sup>のり</sup>をつけ、手には小槌と杵<sup>きね</sup>をたずさえて。衛兵もこれを見ず、警官もこれを知りません。護衛の武官は宮殿の外を守り、雑役夫は内にいる。これでは役人も安全を確保できず、臣は万一の事態を恐れずにはいられません」

「また鄭<sup>てい</sup>と衛<sup>えい</sup>の音楽は、古には淫<sup>ひん</sup>らなものとされていました。その昔、『朝歌<sup>ちやうか</sup>』という名の里から車を引き返させたのは墨翟<sup>ぼくたく</sup>、夾谷<sup>かやく</sup>の会<sup>かい</sup>で剣を振るつたのは孔子でした。淫<sup>ひん</sup>らな

遊楽を古の聖人は非とし、今の賢人は過失である、としています。最近、宮中よりたびたび太鼓の音が響いております。大楽署<sup>だいがくしよ</sup>二五の芸人は宮中に入ったまま、出ではきません。これを聞く者の、足はがたがた震え、噂をする者は、おののくばかり。先年の太宗皇帝のお言葉をどうか今一度思い出してください。そのご意向は礼を尽くし、その戒めは思いやりにあふれるものでした。太子にとって守るべきもの。微臣にいたっては恐れ、ひれ伏すばかりのものでございます」

「臣は東宮に仕え奔走してまいりましたが、長い年月が経ちました。犬馬すら主恩を知り、木石すら物に感じるといいます。狭い料簡ではありませんが、誠心をもって進言せずにはおられません。」

魯の臧孫<sup>ざいそん</sup>二六は、ただ意に沿い、ご機嫌を伺う者を疫病にたとえ、春秋の世では、顔を犯し、耳に逆らう忠臣を薬石にたとえました。伏してお願いたします。工芸をやめ、労役夫を帰し、鄭衛の音楽を絶ち、群がる小人の輩を退けられますように。そうすれば、父子・君臣・長幼の三つの道がしかと備わり、天下泰平の世となるに違いありません」

承乾はこの書を見て、惘然とした。

十五年、承乾は繁農期に天子の與<sup>よち</sup>丁<sup>てい</sup>二七を宮中に召す。長々と労役させ、交替を許さなかつ

た。人々は恨みを抱く。また、私的に突厥とつてつの若者どもを宮中に引き入れた。子子寧は上書して諫める。

「臣は聞いております。』上天は至上の高みにあるが、日月がその徳を照らし、明らかにしている。明君が至聖であるのは、補佐の臣がその功を助けるからである」と。

それゆえ、周の成王は太子に立つと、毛公・畢公ひつこう一八に正されたのです。漢の景帝は太子の時、夏黄公・綺里季きりき一九等四人の賢老の助けを得る。周公は、世継の法を子の伯禽はくきんに授け、賈誼かぎ二〇は文帝に嗣法の重要性を進言しました。これらの太子たちはみな、正言の人、直臣に手厚く懇ろに接しております。歴代の賢君は太子に度々訓戒しなかつた者はございません。まことに太子の地位は、世継ぎの君であり、副国王にあたるもの。その資質が善であれば、地の果てまでもその恩にうるおい、悪であれば国中が禍をこうむるものです」

「近頃聞くところでは、下僕・御者・與丁・獸医などをこの春のはじめより、夏の終わりまで宮中で使役し、交替を許しておられないとか。ある者は家に親があつても孝行できません。またある者は、幼子があつても養育が叶いません。春に畑を耕すことができず、夏に栽培、種蒔きができないこととなる。これは生死にかかわり、恐らく怨嗟えんさの聲が満ちましよう。もしも天子のお耳にこれらが達せば、後に後悔しても遅すぎるのではないでしようか」

「また突厥の達哥支らは、ことごとく人面獸心の輩です。これに近づけば名声を損じ、これに親しめば徳が地に墮ちます。しかしながらこの者どもを御殿に引き入れておられる。人皆、恐れおののいております。愚かな私がひとり不安に思っただけではございません。殿下には、上は太宗皇帝の御心に叶い、下は万民の望みを叶える義務があります。小さな悪とて軽視し見逃してはならぬ、小さな善とて見落とす、なさざることがあつてはなりません。常に悪の道を閉ざし、その芽を摘み取る方法があるはず。それは不肖の者を退け、賢士、良臣に馴れ親しむこと。かくなれば、善の道は日に日に盛んに、徳政ははるか遠くまで鳴り響くことですよ」

承乾は激怒し、張師政と紇干承基を刺客として差し向け、于子寧を暗殺しようとした。

子寧はこの時、母の喪に当たっていたが、勅令により復職、詹事となっていた。

刺客はひそかに子寧の家に入る。が、喪に服した子寧が苫に臥し、土塊を枕にしているのを見て、殺すに忍びず引き上げた。承乾が敗れて後、太宗ははじめてこの事実を知り、子寧を深く慰勞したのであつた。

## 卷第十

### 論慎終 第四十

### 第五章

貞觀十三年、魏徵は太宗が儉約を続けることがかなわず、近頃すこぶる贅沢放埒に振舞いだしたことに危惧を抱いた。そこで上表文を奉つて諫言した。

「古、天命を受け即位した帝王を見ますと、みな国家を万世に伝え、将来の計を子孫へ遺さんとしております。彼らは朝廷で政令を発する時は、以下のように心がけたものです。」

政治の根本は、素朴で誠実。浮ついた華美を廃する。人材は忠良を選び、邪佞をいやしむ。制度は奢侈を絶ち、儉約をめざす。生産は穀物・布を重んじ、珍宝奇玩を捨てるべし、と。

天命を受け即位した当初、これらは守られ世は治まります。しかし世が太平となるや、これらは反古となつてしまい、風紀は乱れていきました。」

「それはどうしてでしょうか。ひとたび万乗ばんじょうの天子の位にのぼれば、四海の富はわがものとなり、命令に背く者なく、人がみなわれの真似をするため公正な道は私情にゆがめられ、礼節が欲望によって失われてしまうからではありませんまいか。古語に、  
『知ることが難しい三三』のではない、行うことが難しいのである。行うこともまた難しくはない、最後まで成し遂げる三三三三』ことが難しいのだ』  
とあります。まこと、その通りではございませんか。」

「伏して思いますに、陛下は弱冠二十歳にして、天下の乱れを平定。国内を統一して、はじめて帝業を開かれました。そして貞観の初年には壯年を迎え、欲望を抑え、儉約に努め、国内外は静まりすこぶる安定した世が実現したのです。その功績を論じる時、湯王、武王とて比べるに足りず、その仁徳を語る時、堯・舜のごとき聖帝にも決してひけはとりません。  
臣が拔擢されお側に仕えてより、十有余年。常に帷幄きわくに侍し、しばしば君のご明察に接してまいりました。陛下は仁義の道をすすめ、自らも実行し、儉約の志も変わることはありませんでした。」

『一言にして国を興す二四』

とは、まさにこれをいっただもの。この立派なお言葉は、今も耳に焼きつき、忘れることは

できません。しかるに近頃、その志が曲げられ、人間味豊かな政治が失われ、終りをまっとうできないのではないかと恐れています。今慎んでこの耳に聞き及んだことを述べますと、以下のごとくです。」

「貞観初年、陛下の無為無欲、清らかにして静かな徳による教化は、遠く未開の国にまで及びました。しかし今日、その風紀は徐々に衰えつつあります。ただそのお言葉を聞くなら、遠い上古の聖人をもしのぎます。しかしそのふるまいを見るなら、近代の凡主となんら違いはない。その理由を申し上げましょう。」

漢の文帝、晋の武帝は、ともに上古の聖人とはいえませんが、漢の文帝は千里の名馬献上を辞退し、晋の武帝は美しい雉の羽の皮衣を焼き捨ててしまいました。陛下は今、駿馬を万里のはてまで探し求め、珍宝奇玩を外国より買い求めておられる。それらの品物の行列は沿道の人々を怪しませ、異民族には軽蔑されている。凡主といった理由はここにありません。」

これが、終わりをまっとうできない理由の第一です。」

「昔、子貢は師、孔子に、民を治める道をたずねました。孔子はいう、

『六頭立ての馬車』<sup>五</sup>を、腐った手綱で操るがごとく危うきもの』

と。子貢が、なにゆえかほどに恐れるのですか、と重ねて問えば、孔子は、

『民は正しい道へと導かざる時、必ずおのれの敵となるもの。それを恐れずにおられようか』  
と答えたものです。書経には、

『民は国の本』<sup>二六</sup>である。本固ければ国安し。民の上たる者、その大本をなにゆえ軽んずることなどできようか』

とあります。貞観のはじめ頃、陛下は民をあたかも病人のごとく慈しんで見、働く民をわが子のごとく愛していたりました。質素儉約を旨とし、大きな宮殿を建築することなど決してなかつた。

ところが近年、奢り、気ままにふるまいだし、もはや以前の慎みも忘れたかのごとく、軽々しく民に苦役を与え、

『民は平和になれば、わがまま勝手にふるまいだすもの。苦役を与えれば治まるのだ』

などとおっしゃる始末。古来、民が楽をしたことにより国が傾いた例などありません。民の逸楽を恐れ、ことさらこれらを酷使したことなどありません。それが、それは国を保つ言葉ともいえず、民を治める将来の計とも思えません。

これが、終わりをまっとうできない理由の第二です。」



「貞観のはじめには、陛下はおのれを損じても、人民の益を図ろうとされてきました。今は欲望のおもむくままに、人民に勞苦を与えています。謙虚にして儉約を重んじたふるまいは、年ごとに変貌していき、贅沢な好みは日ごとにつのつていくばかり。絶えず人民を憂うと口にしなから、実際はご自身の娯樂のみに随分ご熱心です。宮殿を造ろうとする時は、臣下に諫められることを恐れ、先手を打っては、

『もしもこれがなければ、帝王の身として具合が悪い』

などとおっしゃる。臣下の情として、このようにいわれてはあえて諫言できまじょうか。これはただ、諫言する者の口をふさぐだけの目的。どうして善き進言を求める、などといえまじょう。

これが、終わりをまっとうできない理由の第三です。」

「人の成功も失敗も、すべてどのようなものと関わるかによって決まります。蘭らんしの芳香ニも、鮑魚ほうぎょの悪臭も長く嗅げば、その匂いに慣れてわからなくなるもの。影響を受ける対象は、よくよく吟味しなければなりません。

貞観のはじめ、陛下は名誉と節度を重んじ、人に好悪の念を抱かず、善人とのみ親しみ、君子を愛し、小人を排斥しました。しかし今は、そつではない。小人を侮りあなご馴れ親しみ、君

子を敬して重んじています。君子は重んじるものの、敬して遠ざけ、小人を軽んずるものの馴れ親しみ近くに侍らせている。親しみいつも近くにいればその悪がわからなくなり、いつも遠ざけていけば、その善が見えなくなるもの。君子の善が見えなくなれば、離間をはかる者がなくとも、自然に距離ができてしまいます。小人の欠点に気づかなくなれば、時とともに親密になっていく。小人を側におくことは、正しい治世の道にあらず。君子を疎遠にすることは、興国の道とはいえず。

これが、終わりをまつとうできない理由の第四です。」

「書経に、

『無益なことで二八有益なことを害さなければ、何事もうまくいく。珍奇なものばかりを賣んで日用のものを賤しんだりしなければ、民の生活も満ち足りる。犬馬は国産にあらざれば飼わず、珍獣は国に育てず。』

とあります。陛下は貞觀のはじめ、聖帝堯舜を行動の手本とされ、金を捨て、宝玉をなげう擲ち、古代の質素純朴な世界をめざされました。ところが近年は、珍品奇玩きがんを好むようになられた。入手の難しい品物も、いかなる遠方よりもいたらざる物はなく、精妙な工芸はやむことがありません。このように主上が派手で華美を好みながら、下々に純朴を求めたとしても、かなえられることなどありえまじょうか。商工業ばかり盛んとなる世の中、豊かな農業を求めた

としても、これもかなわぬこと明白です。

これが、終わりをまっとうできない理由の第五です。」

「貞観のはじめ、陛下はまるで喉の渴いた人が水を求めるごとく賢人を求めたものです。善き人の推薦する人材は迷わず信任して活用された。その上、常に賢者を求める気持ちが届ぬのではないか、と恐れていました。

ところが近年、人の登用は、好き嫌いで決めていきます。善人たちが一致して推薦した人材も、ひとたび疑いをもてば、即座に遠ざけてしまいます。そもそも人の行いには波があるものの、その成果は確固としたもの。一時の批判がその人の全体の評価を必ずしもくつがえすものではありません。長年の実績、功績を一瞬にして捨て去ってよいものでしょうか。

君子とは、仁義を重んじ大きな徳を世に広めんとする者。逆に小人は、人を陥れることを好み、わが身の利得のみを考える者。しかるに陛下はこの根本を考えず、いともたやすく人を断罪します。これは道を守る者を日々遠ざけ、わが身の栄達だけを求める者を日々進めることとはなりませんまいか。ついに人は日々の過ちを逃れさえすればよい、と努力を放棄するようになるものです。

これが、終わりをまっとうできない理由の第六です。」

「陛下がはじめて天子の位に昇られた時、高い位につきながらも深く民情を見、心は清く静かに、欲望は全く捨てておられた。宮廷から綱も弓も捨て、遊獵など思いも寄らぬご様子でした。しかし数年もすると、その心は変わってしまった。古来の王のごとく百日間も狩獵で留守にするというほどではないにしても、帝王の三驅さんくの礼レを忘れ、狩獵三昧を人民に非難され、名鷹・良犬を遠く異国にまで求めるようになってしまいました。時にはただの遊獵を軍事演習と称して、遠路はるばる出かけ、早朝から深夜まで朝廷を留守にする。夢中になって獲物を追い、馬を走らせて遭あう不慮の事故を気にかける様子もない。事故が起きてしまった後、どのように救うことができるといえまじょうか。

これが、終わりをまっとうできない理由の第七です。」

「孔子は、

『君、臣を使うに礼をもつてし、臣、君に仕づるに忠をもつてす』

といいました。臣下に対する君の道義が軽くても良いといえまじょうか。陛下が天子の位につかれた当時、尊敬の念をもつて臣下と接せられたため、君恩は厚く下に達し、臣の忠心もまた厚く上に届けられたものです。私どもは持てる力を尽くし、心に一片だに隠すものなどありませんでした。

しかし近頃、陛下には軽はずみで粗略な点が見受けられます。派遣された地方官が奏上の

ため入朝し、宮中にて現地の情勢を報告しようとする。しかし陛下との面会はかなわず、願いが聞き入れられることもありませぬ。それどころか、不意に不備を指摘され、ささいな過失をなじられます。これではいかに聡明で、弁舌にすぐれた臣下であっても、誠実に忠を尽くすことがなりましようか。上下心を合わせ、君臣ともに安泰であるように、と望んでもとつていかなえられるはずもない。

これが、終わりをまっとうできない理由の第八です。」

「傲おごりは長ながず可よからず、欲ほはしい縦まにす可よからず、楽しみは極む可よからず、志は満たす可よからず(礼記)、といます。この四つは前代の王に福を招いたものであり、賢者達人が深く戒めとなすものです。陛下は貞観のはじめ、努力して怠らず、おのれを屈して人に従い、常にわが不足を思つておられました。

しかし近頃、にわかにわかに尊大気ままとなつて、わが功績の大なるを誇り、前代の王を蔑さげすみ、わが聖明を鼻にかけ、当代の賢者を軽んじています。これは傲おごりが長じたため。

何かを欲すれば、すべて思い通りにやり遂げてしまつ。一時一時気持きもちちを抑え、諫めに従つても、結局その思いを捨て去ることができません。これは欲ほが縦まとなつたため。

今、陛下の願いは楽しみ遊ぶことのみあり、その心に果てはありません。政治をひどく妨げるといふほどではありませんが、また道を行ひ治世に打ち込んでいるとも申せませぬ。

これは楽しみを極めんがためです。

国内は平安にして、四方の異民族は心服しております。しかるになお、遠征軍を立て、最果ての国を討伐せんとする。これは志を満たさんとするもの。

側近や親しい者たちは、君旨におもねり口を開かず、疎遠な者は無論臧を恐れ、あえて諫めるはずもありません。こうしたことが積もり積もれば、やがて聖徳に疵がつきましよう。

これが、終わりをまっとうできない理由の第九です。」

「昔の聖帝、堯舜や殷の湯王の時代にも、全く災害が起きなかつたわけではありません。しかしこの人たちが聖帝と称される理由は、終始一貫しての無為無欲にある。災害に遭えば、民を憂い手を尽くし、安らかな時にもおごらずその姿勢を変えなかつたからです。

貞観のはじめ、わが国は毎年霜害・早害に見舞われました。都の人民は食物を求めて地方へと流れた。幼き者を負い、老いたる者の手を引き、行き来する者数千にもおよびました。しかし一戸たりとも逃亡者なく、一人たりとも恨み言を口にする者はおりません。これは、陛下の人民を憐れみ守る、真心をよく知っていたからです。たとえ飢え死にしようとも謀反など思いも寄りませんでした。

近年人民は国家の労役に疲れています。とくに都近く、関中の人民は疲弊がはなはだしい。工芸職人は休みなく働き続け、正規兵は余計な仕事に駆り出されています。国が統制する交

易品は村々を行き交い、輸送車は道に途切れることなく続いていく。今や小さな災わざいが起こっただけで一触即発の気配。ここで水害や旱害が起きれば、おそらく人民は以前のようになん静を保つことはなりません。

これが、終わりをまっとうできない理由の第十です。」

「臣は、禍福に門なし三〇、ただ人の招くところなり、と聞いています。人に疵わざがなければ、災いはむやみにふりかかるものではありません。」

伏して思いますに、陛下が天下を統一されてから十三年余、道三三は国内にあまなく広められ、威は遠く海外にまで達しています。年々穀物は豊かに実り、学問教育は振興。才能あふれる人材が輩出され、農産物ははなはだしく増え、まるで水や空気のように人を満たしています。

しかし今年に入ってから、天災がたびたび見舞い、猛暑が旱害を招き、遠方の郡県にまで及びました。悪人どもが跋扈はつこし、今や都にまで犯罪者がはびこっております。そもそも天が直接口をきく三三わけではありません。天変地異をもって戒めとするのみ。驚き恐れ、憂慮すべきは、天の言葉です。

今、この戒めを受け止め、善言に従い、周の文王の慎み三三を学び、殷の湯王の自らへの罰

三四をかえり見るべきです。前代の善政を努力して実現し、当今の不徳はよくよく改め、人民と共に手を携えて心を入れ換え、耳目を一新するならば、天子の位は無窮となり、万民の幸いは極まって、何事にも動ぜぬ不滅の国となりましょう。」

「このように考える時、天下国家の治乱安危は、ただ天子一人にかかる也の。当今の太平の基盤は、すでに天より高く築かれています。しかしなお、九仞きゅうじんの功も一簣いちきに欠く三五、と申しましょう。今は、千年に一度、ただ一人の聖天子がましますまことに得がたい時代。しかしそれほどの明君でありながら、為すべきことを為されず、私ごとき卑しい臣下が、愁い煩い、長嘆息している次第です。」

臣はまことに愚かにして、機会をもわきまえません。しかし、およそ見聞したところを十か条、聖聴に上申いたしました。

伏して願います。陛下が臣の世迷いごとを聞き入れられ、下々の意見も合わせて参考とされますように。さらに、かような愚見にも千慮の一得があり、聖務をいささか補うこととありますように。これがかなうならば、この無礼の罪により死んだ日こそ、臣が生まれた日。喜んで死罪を承れましょう。」



この進言が奏上されると、太宗は魏徴にいった。

「臣下が主君の旨に従うことは、はなはだ安く、その情に逆らうことは、はなはだ困難である。公は常に、朕の手足や耳目となつて、思慮深い意見を奏上してくれる。

今、わが過ちを悟つた。必ずこれを改めたいと思う。なんとしても終わりをまつとうせんと願うゆゑである。もしも公の進言に背いてしまつた時、どのような顔をしてふたたびあなたと会うことができようか。またどんな方法をもつて、天下を治めていくことができようか。

この上疏文を手にしてより、くりかえし綿密に検討してみたが、その言葉はいかに強く、その理はいかに正しいかを思い知らされたのである。そして、これらを屏風に仕立てて、朝な夕なに仰ぎ見ることとし、史官に命じて記録させた。千年の後の世の人に、君臣の義を知らしめんがためである。」

太宗はこれにより、魏徴に黄金十斤と宮中の御馬二頭を賜つた。

一 張玄素 隋末、景城県の戸曹。竇建徳が景城を落とした時、その長である玄素を捕らえ殺そうとした。県民千余人がその清廉な人柄を惜しみ、玄素救命のため身代わりに全員死ぬことを申し出たという。

唐朝となって太宗により拔擢。侍御史、給事中へ累進した。貞觀四年、太宗へ洛陽宮殿建立計画を諫言し、魏徵は「張公ついに回天の力有り。仁人の言その利博きかな」と感嘆した。（本書巻第一 納諫

第五 第三章より）

貞觀年中、太子承乾の右庶子となつて、命がけてこれを諫め教導した。

二 天は選ばれた者に 『書経』蔡仲之命篇に「皇天無親惟徳是輔」とある。

三 聖王湯 殷の湯王。殷の創始者。夏の暴虐な王桀を倒して殷王朝を立てる。夏の禹、周の文王、武王と並び聖王として知られる。

四 学問というものは、「事古を師とせずして、以て克く世を永うするは、説が聞くところにあらず」と傳説が殷の高宗に告げた、とある。（『書経』説命篇）

五 小悪も見逃さず 「悪小なるを以て之を為すなかれ、善小なるを以て為さざるなかれ」。三国蜀の劉備が継嗣劉禪を戒めた遺訓。（『蜀志』先主伝注）

六 皇太子といえども 『礼記』文王世子篇に、太子はたとえ天子の子であっても学校では長幼に従つた席次につく、とある。

七 素晴らしい素質 太宗と長孫皇后の間に生まれた太子承乾は年少の頃、聡明で政務の裁決も滞りがなかつたという。しかし足に不具合があり、かつ太宗が弟の魏王泰を偏愛したため、長じるにおよんで自暴自棄の行動をとつたともいわれている。

八 視善問堅 論尊師伝第十章「問寝視膳の法」参照。子が親の安否を気遣い、師に教えを乞う、孝行と敬養の法。

九 善に従うこと、流るるがごとし。『左伝』成公八年にある言葉。

一〇 良薬口に苦し。『越絶書』越絶外伝計倪、「苦薬は病に利あり、苦言は行に利あり」より。

二 西戎の人は非難。秦代、西戎の由余は秦に使者として遣わされる。穆公に宮殿を見せられたが、「これが中国が乱れる原因である」と笑ったと伝える。『史記』秦紀より。

二二 趙盾。春秋時代、晋の靈公の大夫。

二三 朝歌。殷の時代の邑の名。戦国時代、音楽を不要とした墨子がこの邑にさしかかった時、その名を知って、立ち去ったという逸話より。『文選』鄒陽の於獄上書自明にある。

二四 夾谷の会。孔子が活躍した諸侯会合の名。定公十年、魯の定公は斉と和議をし、夾谷の地で景公と会見をした。景公は宮中の樂を奏したいと申し出、俳優等が戯れながら登場、定公に迫ろうとする。孔子は即刻役人に命じて、舞人の手足を切らせた。孔子は毅然とした態度で主君の身を守り、かつ魯の面目を保ったという。『史記』孔子家語等。

二五 大楽署。唐代、樂人研修のための公的機関。

二六 臧孫。臧武仲のこと。春秋時代、魯の大夫。名は紇(こつ)。

二七 與丁。車引き。

二八 毛公・畢公。周王の補佐をする臣。毛公叔鄭と畢公高。

二九 夏黄公・綺里季。当卷注五二の「商山の四皓」参照。

三〇 賈誼。前漢の文帝に仕える。長沙王・懐王を教導したが、若くして亡くなった。

三一 苦に臥し。親の喪中に子は、小屋に引きこもり、むしろ一枚の上に土枕をして寝ることとなっていた。

三二 知ることが難しい。『書経』説命篇、「之を知ることの艱きに非ず、之を行ふこと惟れ艱し」より。

三三 最後まで成し遂げる 『左伝』襄公三十一年、「克く終有るは鮮(すくな)し、之を終ふること実に難し」より。

三四 一言にして国を興す 『論語』子路篇、「もし君為(た)るの難きを知らば、一言にして邦を興すこと幾(ちか)からずや」より。

三五 六頭立ての馬車 『説苑』政理篇、『孔子家語』致思篇にある問答。

三六 民は国の本 『書経』五子之歌篇、「民は惟れ邦の本、本固ければ邦寧し。…人の上為る者は奈何ぞ敬せざらんや」より。

三七 蘭麝の芳香 蘭、麝ともに香草の名。鮑魚は塩漬けにした臭い魚。『説苑』雜言篇に「孔子曰く、善人と居るは蘭芷(麝と同じ)の室に入るが如し。久しうして其の香を聞かず、即ち之と化す。悪人と居るは鮑魚の肆に入るが如し。久しうして其の臭を聞かず、亦之と化す。」とある。

三八 無益なことで 『書経』旅獮篇、「無益を作して有益を害せざれば、功乃ち成る。異物を貴び用物を賤しまざれば、民乃ち足る。犬馬は其の土性に非ざれば畜(やしな)はず、珍禽奇獸は国に育(やしな)はず」より。

三九 三駆の礼 天子の狩猟にあたって、三方のみを囲い、囲みの前面を開け無用な殺生と捕獲を控えたもの。『易経』比卦九五に「王用(も)つて三駆して前禽を失す」とある。また一説には、狩猟の三つの礼を規定する。一つは祭祀の時、豆器に盛る乾肉のため、二つは賓客をもてなすため、三つは君の厨を満たすためのそれぞれの礼とする。

三〇 禍福に門なし 『左伝』襄公二十三年にある。

三一 道 徳治による人道。

三二 天が直接口をきく 天は人のように言葉で警告することはない。日照りや大雨、彗星などの天象を

もつて吉凶の前兆を表すものである。『易経』繫辞伝上、「天、象を垂れて吉凶を見(あらわ)す。聖人に象(かたど)る」より。

三三 周の文王の慎み 文王が天意を畏れていたこと。『詩経』大雅大明篇に、「維れ此の文王小心翼翼」とある。

三四 湯王の自らへの罰 湯王は大旱書の時、自らを生贄とし天に祈った。『説苑』君道篇、「湯の時大旱七年、…之に祝せしめて曰く、政節ならざるか、人をして疾ましむるか、苞苴(ほうしよ)行はるるか、讒夫昌(さか)んなるか、宮室営むか、女謁盛んなるか、何ぞ雨ふらざるの極まれるや」とより。

三五 九仞の功も一簣に欠く 『書経』旅殫篇に、「山を為(つく)る九仞、功一簣に欠く」とある。積み重ねた多大なる功績も、道半ばに休止する時は一瞬にして瓦解する、との意。